

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-141	12-034	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
<b>題名 (原題/訳)</b>		
Correlates of recovery from alcohol dependence: a prospective study over a 3-year follow-up interval. アルコール依存からの回復の関連 : 3年間の前向き追跡研究		
<b>執筆者</b>		
Dawson DA, Goldstein RB, Ruan WJ, Grant BF.		
<b>掲載誌</b>		
Alcohol Clin Exp Res. 2012 Jul;36(7):1268-77.		
<b>キーワード</b>		
アルコール依存症、断酒中の回復、非断酒中の回復、研究デザイン、前向き		
<b>要 旨</b>		
<b>目的 :</b> アルコール依存からの回復に関連する要因は異なる長所と限界を持つ様々な研究デザインより同定されている。本研究の目的は、同じデータを用いて横断研究と 3年間の前向き研究とで回復の関連を比較することである。		
<b>方法 :</b> データは Wave1 (2001-2002 年) および Wave2 (2004-2005 年) に調査した National Epidemiologic Survey on Alcohol and Related Conditions (NESARC) を使用し、Wave1 で過去 1年以内に DSM-IVにてアルコール依存と診断された 1172名のベースライン特性と Wave2 でのアルコール依存からの回復を調査した。		
<b>結果 :</b> 断酒中の回復は民族性 (黒人、アジア人、ヒスパニック)、ベースライン時に 1歳未満の子供がいる家庭、追跡期間中の週 1回以上の礼拝への参加、ベースライン以前に 3年以内の 12段階からなる援助に参加で有意に関連した。非断酒中の回復はベースライン時の未婚、ベースライン以前の 1年以内に仕事上の問題を持っているまたは失業、追跡期間中の週 1回未満の礼拝への参加、ベースライン時の喫煙とエタノール摂取の量、ベースライン以前の 3年以内に初婚が終了したと正の関連があった。これらは有意水準の周辺も含んでおり ( $0.05 < p < 0.10$ )、一般的に先の時間依存性共変量を持つ擬似的な前向き生存分析の結果を支持するが、Wave1 の NESARC データの横断分析とは多くの点で異なった。		
<b>結論 :</b> 回復の関連要因を解釈する際、研究デザインの様々な特徴は考慮されるべきである。横断解析によってその後の回復要因を同定することは多くの場合誤った解釈につながるが、時間依存性共変量を持つ擬似的な前向き生存分析は前向き研究からの結果と同程度妥当な結果を生むかもしれない。		